クォータリーレポート

気仙沼・本吉だより

第１３号　平成２３年１２月
発行：気仙沼地方振興事務所

「救急フェア２０１１」の開催

（気仙沼保健福祉事務所）

９月３日（土），９月９日の「救急の日」を前に，イオン気仙沼店において，「救急フェア２０１１」が開催されました。会場では，震災以降医療ボランティアとして活動していただいていた気仙沼巡回療養支援隊から３名の方が一日救急隊長に任命され，救急医療の普及啓発活動を行っていただいたほか，救急隊員による心肺蘇生の実技講習や保健師による健康相談，献血等を実施しました。

震災以降，救急救命関係に対する関心が高まっておりますが，突然に心肺停止した人がいる場合，「１１９番通報」，救急隊が到着するまでの「応急手当」が必要となります。日ごろから近くの AED 設置場所の確認や，応急手当の方法について御確認いただきたいと思います。

（救急隊員による心肺蘇生法実技講習の様子）

※実施団体

気仙沼・本吉地域広域行政事務組合消防本部，気仙沼地区地域医療委員会，社団法人気仙沼市医師会，気仙沼市献血推進協議会，宮城県気仙沼保健福祉事務所

「宮城県被災者支援従事者研修基礎研修（前編）」の開催

（気仙沼保健福祉事務所）

宮城県サポートセンター支援事務所では，現在，サポートセンターで活動する方々などを対象として「宮城県被災者支援従事者研修」を気仙沼地区，石巻地区，仙台地区の３会場で実施しています。

第１回目として，１０月２６日から２８日まで「基礎研修（前編）」が気仙沼保健福祉事務所大会議室を会場に開催され，６９名の参加がありました。

テキストは，東日本大震災の被災者支援のために作成されたもので，阪神・淡路大震災の経験が活かされたものとなっています。研修のほとんどがグループワーク形式で進められ，一つの課題をみんなで考え，みんなで結論を出すことにより，活発な意見や情報の交換が行われていました。

講師からは「支援員さんがひとりで抱え込まないで，多様な人たち・機関との連携・協働を図ってください。」との話がありました。

平成２３年度中に今後，６回の専門研修と１回の基礎研修（後編）が開催される予定です。

※ サポートセンターは，東日本大震災により被災された方々が仮設住宅などで安心して暮らせるよう，地域の見守りや生活・健康相談，子育て広場や介護予防教室，サロン活動などを行うため，市町が設置しているものです。

（研修会の様子）

「ガンカモ類の生息調査」を開催

（気仙沼地方振興事務所農林振興部）

１１月９日（水）の早朝から，気仙沼地方振興事務所管内におけるガン，カモ，ハクチョウ等の飛来地３１箇所で「ガンカモ類の生息調査」を実施しました。

この調査は，湿地の保全や鳥獣保護区の設定等に活用するほか，ガン，カモ，ハクチョウ等の冬期の生息状況及び渡来傾向，保護管理を図るべき生息地等についての基礎資料を得る目的で，当県では昭和４４年度から行っています。

調査時期は１１月（渡来期），１月（渡来最盛期），３月（渡去期）の年３回で，このうち１月調査は全国一斉に行うこととしています。

今回の調査結果については，ハクチョウ類２羽・ガン類１８羽・カモ類１，０４０羽の計１，０６０羽となっており，県全体では２０６，０００羽（昨年度：１８９，９８５羽）でした。ここ３カ年の傾向としては，ガン類の増加傾向が見られます。

これからも，数多くの野鳥が見られる環境づくりに心がけたいものです。

（南三陸町内：折立川）

「南三陸米新米試食会」の開催

（気仙沼地方振興事務所農林振興部）

実りの秋を迎え，10 月 29 日（土）に南三陸米の新米試食会が開催されました。南三陸米とは，JA 南三陸管内（気仙沼・本吉・南三陸）で生産された「ひとめぼれ」の１等米を独自ブランドとしたものです。JA 南三陸では南三陸米地産地消推進協議会の活動として，地産地消の推進もさることながら，田んぼの生き物の大切さと地元産米の安全を子供たちに知ってもらうために，生き物観察会や南三陸米図画コンクールを行っています。図画コンクールの入賞者らは家族で新米試食会に招かれ，表彰式が行われました。最優秀賞作品の一つは，生き物とのふれあいが非常に楽しそうに描かれており，南三陸米 PR ポスターに採用されました。参加者はみんな美味しそうにご飯をほおばり，インタビューでは「もちもちして美味しい」などの感想が聞かれました。これから新米がたくさん店頭に並びますので，地元でとれた良質なお米「南三陸米」をぜひご賞味ください。

（新米試食会の様子）

「仮設住宅で花と野菜のふれあい交流会」を開催
～仮設住宅での生活に少しでもやすらぎとうるおいを～

（気仙沼地方振興事務所農林振興部）

被災された方々は，仮設住宅において新たな生活をスタートさせているものの，依然不自由な生活を余儀なくされております。そのため，花や野菜のふれあい交流会を通して，生活に少しでもやすらぎやうるおいを持っていただき，コミュニケーションや交流の促進につなげられたらとの思いで取り組んでいます。

当事務所からの委託（緊急雇用創出基金事業）

を受けたＪＡ南三陸を中心に各関係機関が連携し，自治会組織の協力も得ながら当交流会が気仙沼市・南三陸町の８会場（１１月末現在）で開催されました。

交流会では最初に，花や野菜の説明と作業の手順を示し，各世帯ごとに準備したプランターに協力し合いながら植え付けを行いました。

（説明の様子）

花は，カラフルなパンジーを１列目に移植し，春にスイセンとチューリップがそれぞれ楽しめるよう球根を植えました。また，野菜は，この冬に収穫し味わうことができる「ほうれんそう」と「ちぢみ雪菜」の種を蒔きました。

これからも，花や野菜の生育状況にあわせて，管理指導に定期的に伺うことにしております。

（作業の様子）

南三陸町の木材を活用した「ほぼ日刊イトイ新聞」気仙沼支社開設

（気仙沼地方振興事務所農林振興部）

１１月１日（火），気仙沼市神山に南三陸産スギ材をふんだんに使った「ほぼ日刊イトイ新聞」気仙沼支社が開設しました。

「ほぼ日刊イトイ新聞」は，コピーライターの糸井重里氏が主催するインターネット配信の新聞です。幅広い層に様々な情報を毎日発信しており，気仙沼支社は，気仙沼や他の東北地域の情報を継続して発信して行くために開設されました。

（「ほぼ日刊イトイ新聞」気仙沼支社の外観）

気仙沼支社事務所の外壁には南三陸産スギの角材約１２０本が使われ，窓にもスギの板材で作られた日よけが取り付けられています。

室内には丸太を利用した大きな椅子が置かれ，木の温もりと安らぎが感じられる場所となっています。

これらの木材は，「被災地の木材を活用したい」という糸井氏の思いを受け，南三陸町の丸平木材株式会社が津波の被害を免れた木材を供給したものです。

「ほぼ日刊イトイ新聞」では，当面のあいだは気仙沼と東京を行き来しながら，気仙沼に住む人とほかの場所で見ている人それぞれが，どのような情報を必要としているのかを考えながら，できる範囲で進めて行くということでした。

（糸井氏（前列右）と丸平木材代表小野寺氏（後列左 2 人目））

東日本大震災津波被災をのりこえて「気仙沼茶豆」の収穫始まる

（本吉農業改良普及センター）

気仙沼市階上地域では，食味がよい特産の「気仙沼茶豆」を栽培してきましたが，東日本大震災の津波により大きな被害を受けました。そんな中，階上生産組合では復興に向け６月８日に登米市米山町の「西野北部地力増進組合」の支援を受け３ｈａに播種を行うことが出来ました。今年は品質向上を目指し，害虫防除を徹底したことと，登熟期間の気温日較差が大きいなど天候にも恵まれ，品質・食味とも優れた「茶豆」に仕上がりました。一方，収穫適期は１０日間程度と非常に短いので機械作業は必須ですが，ほとんどの機械が津波で被害を受けたため，新たに補助事業を活用して収穫調製用の機械を導入することとなり，このほどようやく揃いました。

（気仙沼茶豆の収穫の様子）

順調に生育した茶豆の収穫は９月９日から始まりました。「心をひとつに復興へ！！」のシールを貼った３kg入りの箱で毎日２００ケースずつ県内を中心に出荷しています。生産者は，おいしい「茶豆」を是非，消費者の方に賞味していただき，復興が始まったことを実感してもらいたいとしています。

（気仙沼茶豆）

「気仙沼いちご」の復活に向けて，被災したハウスで定植作業が行われました。

（本吉農業改良普及センター）

気仙沼市階上地区では昭和４０年代からイチゴの生産が行われており，「気仙沼いちご」として地域の人々に親しまれてきました。

しかし，３月１１日の東日本大震災による津波で，地域内の栽培施設の約９割が流失する壊滅的な被害を受けました。

（被災直後の様子）

気仙沼市階上でイチゴ生産をしていた小野寺さんも，1,500 ㎡のパイプハウスのうち 500 ㎡を津波で流失しました。しかし小野寺さんは「震災直後は，栽培を継続するべきか悩んだが，「気仙沼いちご」がこのまま衰退していくのは残念なので，何とか栽培を再開したかった。」との思いが強く，震災直後からガレキの撤去を早急に行うとともに，堆積した土の除去及び，湛水と落水を繰り返す除塩作業を行いました。その結果，イチゴの定植が可能なレベルまで土壌の EC 値が下がったことから，被災前の面積のパイプハウス復旧し，作付けを決断しました。

普及センターでは，４月末から除塩作業の方法や土壌分析するなどの支援を行って来ました。今後は定植後の生育調査を毎月３回実施し，今後の生育経過を観察することにしています。

（いちごの定植の様子）

復興！！「南三陸米」

（本吉農業改良普及センター）

南三陸地域内で収穫される１等米を「南三陸米」のネーミングで，平成１６年より例年３００ｔ程度を販売，地産地消を推進してきました。

今年は東日本大震災の津波により多くの水田が被災し，管内では「南三陸米」の生産量が前年より１５０ｔほど減少しました。さらに東京電力福島第１原発の事故に伴う放射性物質が飛散するなどの影響がありました。

こういった状況の中，普及センターでは被災の程度の少なかった水田への作付けを誘導するとともに関係機関と連携して栽培指導やカメムシの発生状況を踏まえた防除指導などを展開してきました。さらに県内では放射性物質調査が行われ，管内の米も安全性が確認され，出荷自粛は９月２４日をもって解除されました。また，被災していた精米工場も代替の工場を確保し作業も可能になり，晴れて１０月３日の出発式にこぎ着けました。今年は震災の影響で「南三陸米」は例年の半分程度になる見込みですが，天候も概ね順調に推移したため品質・食味とも上々となっています。

普及センターでは技術指導を通じながら，今後も「南三陸米」の生産面を支援していきます。

（南三陸米出発式）

県北部管内の磯根漁場緊急被災状況調査について

（水産技術総合センター気仙沼水産試験場）

気仙沼・本吉地区の沿岸域は，三陸リアス式海岸特有の地形から良好な磯根漁場が多く，アワビの産地となっています。東日本大震災に伴う津波により，これらの磯根漁場も被害が懸念されていたことから，気仙沼水産試験場では９月から１０月にかけて潜水による緊急被害状況調査を実施しました。

調査は，管内でもアワビの生産量が多い気仙沼市唐桑，階上，大谷地区，南三陸町歌津，志津川，戸倉地区の６カ所で実施しました。各地区の優良漁場に１００ｍのロープを沈め，１０ｍごとに２ｍ幅の中のアワビ生息個体数を計数すると共に，殻の大きさの測定や天然貝か人工種苗放流貝かの識別を行いました。

（潜水調査風景）

その結果，総ての地区で，産卵が可能な親貝は１平方メートルあたり０．９～３．３個体分布していることが確認され，再生産ができなくなる最低ラインである１平方メートル当たり１個体をほぼ上回っており，今後の産卵には支障

がないことが確認されました。しかし、昨年に産まれた１歳貝と一昨年に産まれた２歳貝がどの地区もほとんど見あたらず，これら若齢貝は津波により被害を受けた可能性が疑われました。

（調査時に見つかった親アワビ）

アワビは県の漁業調整規則により殻長９ｃｍから漁獲ができますが，被害にあった若齢貝がこのサイズになるまでには３年程度かかることから，これらの貝が漁獲の主体になる３年後あたりから漁獲量の減少が懸念されます。また，今回の震災により県のアワビ種苗生産施設が壊滅的な被害を受け，今後４年間程度は十分な放流種苗の供給ができなくなることから，放流貝への依存度が高い南三陸町のアワビ漁場では，更なる漁獲量の減少が懸念されます。これらの調査結果は，１０月２０日に開催された宮城県漁業協同組合磯根資源部会で各地区の代表漁業者に報告して今後の対応を検討してもらったところ，管内の地区では１１月のアワビ採捕を見合わせることになりました。

震災後に沿岸域の透明度が悪くなっている中での目視による潜水調査では，小型貝の発見率が低くなっている可能性もあることから，今年度から平成２５年度にかけて被災した若齢貝の追跡調査を継続的に実施して，漁業者に的確な情報提供をしていく予定です。豊かな気仙沼・本吉地区磯根漁場の復興に向かい，漁業者と一体となって頑張ってまいります。

「気仙沼合同庁舎の移転について」

（気仙沼地方振興事務所地方振興部）

９月２６日(月)に，気仙沼合同庁舎は鼎ヶ浦高校跡地(気仙沼市赤岩杉ノ沢４７－６)に建てられた庁舎に移転しました。

旧庁舎は気仙沼市朝日町にありましたが，東日本大震災の津波により壊滅的な被害を受けました。

このため，旧庁舎内の地方公所は，気仙沼保健福祉事務所に一時避難した後，複数の建物に分散して業務を行なっていました。

新庁舎には，以前の地方公所に加え，同様に震災で被災した旧南三陸合同庁舎内の南三陸教育事務所も移転しました。

新庁舎の完成により，皆様に利便性が向上するよう一層，地域の復興支援に努めて参ります。

（移転後の気仙沼合同庁舎）

「宮城産直市」が開催されました

（気仙沼地方振興事務所地方振興部）

９月１５日(木)から９月１７日(土)まで，「宮城産直市」が東京都上野駅グランドコンコースにて開かれました。

「宮城産直市」では，震災後の復興に向けて頑張っている宮城県の食材や加工品などを販売したほか，地域の魅力を紹介する観光ＰＲブースやイベントブースなども設けました。

（産直市の様子）

イベントブースにおいては，「伊達武将隊」の演武や，観光キャラクターの気仙沼市の「ホヤぼーや」，東松島市の「イートくん・イーナちゃん」，そして宮城県の「むすび丸」が参加した「三陸クイズ大会」も開かれました。

出題者が出したクイズの正解者には，三陸地域の特産品のギフトセットが贈られました。

（三陸クイズ大会の様子）

「宮城産直市」には大勢の人が集まり，宮城県産の食材を買い求めていました。これからも，宮城県の食材のＰＲだけではなく，観光復興キャンペーンを行っている宮城県の観光もＰＲしていくこととしています。

仙台・宮城「食と観光」首都圏大キャラバン

（気仙沼地方振興事務所地方振興部）

１１月１５日（火）に、仙台・宮城「食と観光」首都圏大キャラバンが，東京都を中心とする首都圏各地で開催されました。

今回の首都圏大キャラバンは，県内の食産業・観光をＰＲするため，新幹線「はやぶさ」の車両を臨時列車として借り上げ，総勢６５０人が上京し，イベントなどを通じて東日本大震災からの復興と観光誘客を呼びかけました。

立教大学の新座キャンパスでは首都圏キャラバンの一環として，観光セミナーが開催され，南三陸町の震災語り部の方などが被災地の被害状況や復興に向けた取り組みなどについて講演を行いました。

（観光セミナーの様子）

その他にも，銀座 TS ビルにて気仙沼市の「食と観光・物産」をＰＲする「気仙沼の食と観光・物産キャンペーン」が開催されました。

このイベントでは，気仙沼漁港直送の旬のカツオとメカジキの握りやふかひれスープの試食会（各２００食）が行われました。当日は，多くの方が銀座 TS ビルに訪れ，気仙沼の美味しい「食」を楽しんでいました。

仙台・宮城「食と観光」首都圏大キャラバンを通して，宮城県の東日本大震災からの復興と「食と観光」の素晴らしさをＰＲすることができました。

（握り大試食会の様子）

【あとがき】

震災から８か月が経過し，気仙沼管内では，復興商店街のオープンや各地域における復興市，産業祭り等の開催が連日のように報道されています。また，水産業等経済団体の総会も開催されるなどゆっくりですが着実に復興に向けた動きが見えて参りました。

これも，全国からいただいた数え切れないほどのご支援の賜物であり，心から感謝申し上げます。

さて，朝晩はめっきり寒くなり，気仙沼市でも２１日には初雪が降りました。気仙沼合同庁舎には，現在全国の都道府県から多くの職員の方々に応援に来ていただいております。雪の少ない地域の方々も多いことから講習会を開き，雪道に備える予定であり，応援の皆様には無事に任務を果たしてお帰りいただきたいと切に願っています。